

# 世界観としての哲学とナチズム——ハイデガー、ライナー、レヴィナス

## Philosophy as *Weltanschauung* and Nazism: Heidegger, Reiner, Levinas

馬場 智一

Tomokazu BABA

### 序

二〇一四年のいわゆる『黒ノート』の出版以来、ハイデガーと反ユダヤ主義を巡る議論が世界中で活発に行われている。ハイデガーと政治を巡る問題は、既に一九三〇年代からナチズムとの関わりが知られていた。周知のように、この問題はヴィクトール・ファリアスの『ハイデガーとナチズム』（一九八七年）でより広範に知られるようになる。論争はその後エマニュエル・ファイユ『ハイデガー 哲学へのナチズムの導入 一九三三～一九三五年未公開ゼミを巡って』（二〇〇五年）によって再燃した。

『黒ノート』の編者ベーター・トラヴニーは、ナチズムや反ユダヤ主義とハイデガーの関わりについての立場を三つに整理している。第一に、ハイデガーのナチズムとの関わりはその哲学の根幹に関わるものであるとするファイユの立場、第二に、こうした関わりを彼の哲学の本質から除外するフォン・ヘルマンなどの立場。第三に、いわばその中間として、哲学的思索とナチズムや反ユダヤ主義との関わりを深刻に受け止めながらもファイユのようにハイデガーの哲学全体を哲学的価値のないものとして放擲するわけではない立場である（トラヴニー2015：11-12）。

ハイデガー研究における喧しい議論を前に、論争のただなかに切り込んでゆくか、傍観を決め込むか、様々な選択肢があろう。しかし、その選択の以前に以下の点について最低限の整理は必要であると思われる。

第一に、ナチズムと反ユダヤ主義は、多くの点において近似的な現象であるとはいえ、同一の問題ではない。ナチズム自体は20世紀前半の現象であるのに対し、反ユダヤ主義は、その定義にもよるが、歴史的にははるか以前から存在している。ユダヤ人に対する誤解に基づく批判的言説自体は古代から存在している。資本主義とユダヤ人を結び付ける近代的言説に限ってもその歴史はナチズム自体よりは古く、ナチズムを生んだ背景に反ユダヤ主義があるの

であって、その逆ではない。ハイデガーにおけるナチズムや反ユダヤ主義の問題を論じようとするならば、ナチズムに関する研究と反ユダヤ主義に関する研究の蓄積を、互いに重なる部分はあろうが、それぞれ参照すべきだろう。

第二に、反ユダヤ主義と哲学の問題はなにもハイデガーに始まるものではない。近世以降に限ってみても、たとえばレオン・ポリアコフの『反ユダヤ主義の歴史 第三巻 ヴォルテールからヴァーグナーまで』（ポリアコフ2005）は、イギリス理神論者に始まり、フランス啓蒙、カント、ヘーゲルからワグナーに至るドイツ思想までのパノラマを与えている。他方、マイケル・マックの『ドイツ観念論とユダヤ人——哲学の内的反ユダヤ主義とドイツユダヤ人の応答』（Mack 2003）は、ドイツにおける哲学的反ユダヤ主義の系譜をカントから始め、ヘーゲル、さらに（厳密には哲学者ではないが）ヴァーグナーへと続け、それぞれの反ユダヤ主義の論理がどのようにそれぞれの思想のなかに根を持っているのか、いわば反ユダヤ主義と哲学の内的な連関の解明に注力している。したがって、ハイデガーにおけるナチズムと反ユダヤ主義の問題を扱うに際しては、哲学とイデオロギーの内的な連関とその評価という、より一般的な問題を視野に収めたいと、しかもハイデガー自身がその中に身を置いているドイツ哲学における先例と比較しながら問題を考察する必要がある。その過程で、ハイデガーの問題が、なにもハイデガーに限らない問題として練り直される可能性がある。

本稿は反ユダヤ主義というよりは、ナチズムのイデオロギーとハイデガーの思索の問題に関連している。しかし、既存の膨大な議論や「黒ノート」の内容まで踏まえてこの問題を決算しようとするものではない。本稿はより限定された考察対象からこの問題の一側面に光を投げかけようとするものである。本稿が行うのは、上述のマックが行った作業に連なるものである。ただし、ハイデガーの思索全体に関してそのような作業を網羅的に行うには作業や課題も多く、我々の能力、準備、および紙幅を大幅に超

えるものである。本稿は、その準備作業として、ハイデガーの特定の講義を取り上げることにする。すなわち、ハイデガーの一九二八～一九二九年講義『哲学入門』である。その理由は以下のようなものである。

この講義の一部に着想を得ながら、ナチズムのイデオロギーの一種の護教論的言説を説いた著作がある。ハンス・ライナーの『信の現象』（一九三四年）である。本書末尾で著者は、現代における信仰の可能性として様々なものを挙げながら、ナチスのイデオロギーであったローゼンベルクの『二〇世紀の神話』などをそこに含めている。本書の前半で現象学、存在論の厳密な議論を展開し、信仰という現象がいかに人間の存在構造に基づいたものであるのかを示しながら、ライナーは、そうした存在構造に根を持つものとして、政治的なイデオロギーを含めようとしているのである。

実のところ、本書の哲学的な基礎は前述のハイデガー講義にあるのだが、そのことは以下で示すように本書中に明示的に述べられている。言うなればライナーは、ハイデガーの講義によってイデオロギーを哲学的に基礎付けようとしているのである。ハイデガーの講義によって受けた着想は、一体どのようにしてナチズムのイデオロギーの一つと結びつくのだろうか。その講義が少なくともそのような着想を許すのは、どのようにしてなのか。この点を解明することにより、ハイデガー哲学における反ユダヤ主義との内的関連の一端に光を当ててみたい。

この問いに対する本稿の解答をあらかじめ述べておけば以下ようになる。講義『哲学入門』は『信の現象』にその理論的枠組みを与えている。ハイデガーは、民族主義的なイデオロギーと結びつきうる潜在的なリスクに対して意識的に予防線を張っているようであるが、そのような潜在的リスク自体を根本的になくするような議論構造にはなっていない。

この主張に至るため、本稿は以下のように論述を進める。(一) まず『哲学入門』を聴講していたエマニュエル・レヴィナスによる『信の現象』の書評に沿いながら、『信の現象』が位置している時代精神と問題意識を確認する。(二) 次に『信の現象』がその議論のうち一体どの部分をハイデガーに負っており、ナチズムに対してどのような言及をしているのか、そしてハイデガーのどの議論がナチズムとの関連で問題になるのかを示す。(三) 最後に、『哲学入門』における問題の箇所を検討し、ファイユの行うようなナチズムや反ユダヤ主義との直接的な関連づけは早計であることを確認しつつも、同時に、

ハイデガー自身の哲学の位置づけ自体が、様々な世界観の「墮落」と決して無縁ではないことも明らかにする。

### (一)『信の現象』とレヴィナスによる書評

ハンス・ライナーの名は、現在では余り知られていないが、『義務と好悪』、『哲学としての倫理学』の二点が日本語に翻訳されており、このうち後者については、倫理学の標準的教科書として読まれている加藤尚武の『現代倫理学入門』が、黄金律に関する参考文献として紹介している（加藤 1997 :148）。

『哲学としての倫理学』の訳者松本良彦による「訳者後記」によれば、ライナーは、一八九六年に生まれ、一九二六年にフッサールの指導下で博士号を取得、その後一九三一年ハレで大学教授資格を獲得した。一九四一～四二年にはフライブルクで哲学および心理学を代講し、戦後、一九四七年からは同大で倫理学を教えはじめ、一九五七年にはこのとき創設された倫理学講座の担当教授となっている（ライナー 1972 :313）。

以上からライナーは、たとえばローゼンベルクのような、ナチズムの（学者もどきの）イデオロギーではなく、フッサール学派的衣鉢を継いでフライブルクで長く教鞭を取り、その業績はいまなお読むに値する哲学者として見なされていることが分かる。しかし、それだけにライナーがどのように哲学的なイデオロギー擁護をしえたのか、疑問はさらに深まる。

問題となる『信の現象』が出版されたのはナチがすでに政権についていた一九三四年である。ローゼンベルクの『二〇世紀の神話』への言及があることから、同じ年に出版された同書よりは後に出版されたはずである。

『信の現象』は三部より構成される。第一部はフッサール現象学を手引きに、信ずる（Glauben）という行為の様々な程度と形態が分析される。第二部では、現存在の構造そのものに信の現象の基礎が求められる。ハイデガーの二八～二九年講義に基づいているのは、この信の実存論的基礎付けという作業である。第三部はレヴィナスの手際よい要約に言を借りれば「このようにして規定された信から、いかにして宗教的生における様々な要素や形態が派生するのかを示す」（Levinas 1937a :259）ことが課題となっている。

本書末尾で著者は、「正統派キリスト教」「ドイツキリスト教」「ドイツ異教」、さらには、驚くべきこ

とに「<sup>フェーラー</sup>総統信仰」や「人種」まで、様々な、本来なら慎重な検討が必要な具体例を矢継ぎ早に列挙している。いったいこれらは、信の現象についてのどのような基礎づけから導き出されるのだろうか。実際本書は同時代のフランスでも物議を醸した。本書の書評で、まさに二八～二九年のハイデガーの講義に出席していたレヴィナスは、次のように問うている。

著者が正統キリスト教と『ドイツキリスト教』そして『ドイツ異教』そして総統信仰、人種信仰を同時に正当化しているのを見ると、すでになされた事実を弁明するための方途として哲学を定義してはならないのではないかと、人は図らずも自問してしまう。(Levinas 1937a :259)

この問いには次節で立ち戻るとして、ここではこのような異様な著作が世に問われていた時代の精神を、同時代人であったレヴィナスの哲学的診断からみておきたい。

レヴィナスはフライブルク留学時代に『哲学入門』を聴講している。フランスにおける初期の現象学紹介者のなかで、直接この講義を受講した数少ない一人であっただろう。フライブルクの留学から戻り博士論文を仕上げ、これを一九三一年に出版した後のレヴィナスは、パリで世界イスラエル同盟の職員として働きながら、一九三七年にフランス軍にロシア語通訳として動員されるまでのあいだ、いくつかの書評を残している。複数の書評から読み取れるのは、キルケゴールの実存哲学やハイデガーの『存在と時間』が哲学的に応答している時代の空気と、ハイデガーの影響を受けたドイツの若い哲学者たちに共通の傾向である。ライナーもまたその一例として見られている。ライナー書評と同年のレオン・シェストフのキルケゴール論の書評でレヴィナスは、第一次大戦以後のヨーロッパ世界の時代の空気を次のように評している。

一九一四年の戦争が開いた道徳的危機は、理性がもはや実行力をもたないこと、つまり、合理的文明と、一般的なものの匿名性のなかに失われた個々の魂の要求は、一致しないということを人間に痛感させた […] そこから、様々な形態のもと、非合理主義と暴力の教説が復活してきた。(Levinas 1937b :139)

人類史上最初の本格的な総力戦であり、塹壕戦により長期化し一千万人近い戦死者を出した第一次世界

大戦終結から二〇年後、三〇歳過ぎのレヴィナスは、大戦がヨーロッパ世界に創り出した空気をこのように診断した。人間が互いに殺しあう状況のなかで救いを求める「個々の魂の要求」に、理性は何も答えてくれない。代わりにこうした過酷な現実を、生存競争のための必然とみなし暴力を是認する言説や、理性の代わりに「個々の魂の要求」に答えてくれる信仰ないし信仰めいた疑似科学言説が出現する。そのなかには人種理論やゲルマン神話など、「フェルキッシュ」なものの研究、さらにはヒトラーその人の言説など様々なものが含まれるだろう。

こうした救いのない状況をレヴィナスは、三〇年代の多くの書評のなかで、哲学的な観点から「時間の悲劇」(drame du temps) と評している (Levinas 1931-32 :385, 1933 :294, etc.)。その意味するところは以下のように要約できる。この「悲劇」は、人間が時間において有限であるという人間の条件を意味し、「私」の死を予期しながら生きる人間にとって、有限性とはそれゆえ「孤独」も意味する。キルケゴールの絶望やハイデガーにおける現存在の有限性はこうした孤独についての、哲学的表現である。この有限性を乗り越えるものは、理性が敗北し、信仰の廃れた時代には残っていない。有限性からの救いを求めながらそれが与えられない。それが時間の悲劇である。

こうした孤独を乗り越える哲学的な試みにレヴィナスは幾つかの書評のなかで触れている。H.E. アイゼンフート『哲学的問題としての非合理的なものの概念』は、孤立した自我を分析してゆくことで取り出される「我-君」構造を、宗教的実存と同一視し、悲劇を乗り越えようとする (Levinas 1931-32 :386)。フランススピリチュアリストの系譜に属すルイ・ラヴェルの『全面的現前』は、意識行為の分析を通じて、有限な自我を超えた大文字の存在を析出する。しかしこの場合、時間の悲劇は、大文字の存在という永遠により、すなわち時間の外に出ることにより解消される (Levinas 1934-35 :395)。ここでいう存在は、トマス主義的な存在としての神ではなく、むしろ数学的真理のようなものとして考えられており、レヴィナスは時間の外の非人間的な次元による問題の解決に不満を見せている。

ライナーの『信の現象』もまた、この人間の有限性を乗り越えようとする試みであるが、それは信仰という現象を通じてである。信じるとは「一種の生の音域 (diapason vital) の拡張」であり、これにより「自身の死において孤独な自我と、不安が自我をそこから引きはがした全体とを和解させること」



が可能になる (Levinas 1937a : 259)。

時間の悲劇、孤独は、いわば大戦が人類に否応なく意識させるに至った人間の条件をめぐる不安である。自他関係、永遠の真理、信仰の存在論的な基礎付けといったものによってこれらを乗り越える試みが、哲学者たちによってなされ、それらを読みながらレヴィナスは戦後の他者の思想を準備していったはずだ。ハンス・ライナーの著作は、個々の魂の要求に答えるものがない絶望的な状況のなかで、信仰に解決の道筋を探ろうとした試みであって、この試み自体は、大戦後の時代精神から生じた多くの試みの一例であることが、レヴィナスの書評から理解されよう。したがって『信の現象』という著作の全体を、ナチズムや非合理主義的なイデオロギーを称揚する目的のためだけに書かれたものとしてみるならば、それは一面的な理解にすぎないだろう。

## (二) 信と現存在の形而上学

では、ライナーによれば、信じるという現象はどのように解明されるのであろうか。すでに『信の現象』の概略には触れたので、ここでは特にハイデガーの講義との関わりを中心に見ておきたい。

著者によれば、信は現存在の基礎的構造にその根を持っている (Reiner 1934 :99)。その構造とは世界内存在である。現存在にとって、世界とは信じるべきものとして (als glaubendes) 存在している。現存在はこのような仕方では存在しているのであり、これが現存在の存在了解なのである。存在了解はその根本において投企 (Entwurf) という形をとって現れる。以上の事情からすると、「投企とは、信の根源的形態である」 (Reiner 1934 :99)。

一般的に「信じる」という現象は、様々なレベルを含みうる。たとえば太陽が東から昇るといった日常的な信念や、特定の神の存在への宗教的な信仰も、広い意味では信じるという行為に含まれる。ライナーによれば、そうした様々な行為の根源的な形態が、世界に対する投企であり、これが同時に「世界観」でもある。ハイデガー講義との関連で重要なのは、この投企が「世界観」であるという点であるが、世界観をライナーは次のように定義している。

上述のように描かれた、世界全体をめがけて現存在が己を投企しつつ行う了解の投企 (Verstehensentwurf) を、我々は世界観と呼ぶ。それゆえこれは、現存在が自らに創り出す理論的な「像」ではない。そうではなく世界観とは根源

的に、世界的に (welthaft) 出会われた存在者の全体において現存在自身の目的であるところのものをめがけて己に対して現存在によってつねにすでに投げかけられた投企である。それゆえ、世界内存在としての現存在においては、その世界内に存在しうること (In-der-Welt-sein-können) が問題となるのであるが、このような現存在はつねにすでに世界観を有しているのである！ (Reiner 1934 :119)

かつてディルタイは『世界観の研究』において、哲学史上の様々な立場を、それらに共通の世界観の型によって分類した。このような「世界観の究極の根底は生である」 (ディルタイ 1935:13) とはいえ、彼が収集した様々な世界観は、そのものとしては、世界についての理論的な観想にほかならない。これに対し、現存在が世界に対して根源的に投げかける世界観は、理論的な観想とは区別される。現存在は世界内存在である以上、世界がどれほど危険に満ちていようとも世界の外に逃げ場はない。言うなれば、ここでいわれている世界観は、世界の中で現存在が生き延びるために持たざるを得ない、世界に対する根本的な像である<sup>1</sup>。こうした世界観概念をハイデガーの講義に負いつつ、上記引用の脚注でライナーは、自身の議論が、ハイデガーの世界観概念を特定の方向性に展開したものであることを明記している。

世界観と、現存在の根本体制の枠組みにおける世界観の根源とについてここで与えられている解釈を、著者は、一九二八～二九年冬学期講義『哲学入門』における M. ハイデガーの叙述に負っている。ところで本書で与えられた説明が追求しているのは、ある非常に限定された方向における世界観の構成である。すなわち世界観において成立する全体性をめがけて、その中心が持ちうるもの、つまりある特性である。この特性は、人間の実存に根をもつことにおいて、同時にある人倫的世界の構成にとって本質的なものとして証明されるのである。(精神的、存在論的な側面を除いて) 世界観がもつあらゆる側面についてのより広い研究については、K. ヤスパーズの『世界観の心理学』が行っている。(Reiner 1934 :119)

ディルタイの研究は、「いわゆる「生かれた」世界観をいまだ予感の段階で追求した」 (Reiner 1934 :127) にすぎない。他方、ヤスパーズは人間の実存に根をもつ世界観を心理学として幅広く明らか

にした。しかしその存在論的な分析はハイデガーの講義によって示され、現存在の根本体制にその根源をもつことが示された。ライナーは世界観概念の先行研究についてこのような整理をしているのである。

上記引用で『信の現象』が研究史的に自らを位置づけているのは、このハイデガー的な意味での世界観研究の枠内である。ライナーは、この枠内において、根源的世界観がどのように人倫的世界、具体的には様々な形態の宗教へと発展するのかを、第三部「人間的現存在の根本体制と根本問題構成の内部での宗教的信仰」において論じている。

実のところ、ハイデガー自身もまた当の講義において存在論的な世界観がどのようにキリスト教などの実体宗教へと「墮落」してゆくのかについて触れてはいる。とはいえ、それ以上の展開はなく、その分析は信ずるという行為を中心に行っている訳でもない。ライナーは、『哲学入門』が着手しなかった分析を自らの課題として引き受けているのである。

それでも『信の現象』の第二部から第三部にかけての議論の推移は、大枠では『哲学入門』の第三部に沿ったものになっている。『哲学入門』は、哲学の発生についての一種の人類史的な考察を展開している。それによれば、世界観はまず自然の強大さに対する「拠りどころ」(Halt)、「庇護」(Bergung)として生ずる。その具体的形態は、自然についての哲学ではなく、「神話」である。この拠りどころはその後、「保持」(Haltung)へと変化し、これが哲学すること(Philosophieren)になってゆく(GA27, 390)。しかし保持には三つの墮落(Entartung)形態があり、そのうちの一つがキリスト教のような宗教性である(GA27, 374)。現存在の根本体制から哲学の発生を論じることには注力する『哲学入門』(のとくに後半)に対し、『信の現象』はむしろ、宗教を含めた様々な信仰形態の発生に着目している。実際その第三部第一章は「自然」宗教的な信仰の形成に当てられ、第二章は、そのような「第一段階の」信仰の理論化および戒律の形成を、神信仰(Gottesglauben)の運命(Schicksal)として論じている。「拠りどころ」から「保持」へ、こうした世界観の墮落という理論的な枠組みを、ハイデガーから受け継ぎながら、ライナーはこれを哲学の誕生ではなく信仰の運命の展開に応用したと言えるだろう。その運命の末端に、当時現れた様々な信仰形態が含まれることは上で述べたが、第二部の世界観を論じる際に現れる次の一節を見逃すことはできない。

ここで形成された(ausgebildete)世界観とし

て示されているものは、今日の平均的な言葉の使用法において通常世界観を端的に意味しているところのものと一致する。したがって、たとえば国家社会主義の世界観は一つの形成された世界観である。(Reiner 1934 :126)

「形成された世界像」とは、世界像と世界観が一つになったものである(Reiner 1934 :126)。世界に対して様々に投げかけられた世界観の網の目から生じてくる、世界についての「客観的な像」、「表象」が世界像である(Reiner 1934 :124)。この世界像は本質的に世界観と切り離すことはできないが、両者をひとくくりにしてライナーは「形成された世界観」と呼び、そこに国家社会主義の世界観が数えられると明言している。

そうだとすると、ヒトラーが『我が闘争』で示した「民族主義的世界観」も、ローゼンベルクの「人種的な世界考察」という「新たな世界観的条件 Bedingungen」(Rosenberg 1934: Einleitung)もまた、現存在の根本体制のなかに根をもつのであって、単なるイデオロギーとして一蹴できるようなものではない、ということになろう。存在論的に論じられた「形成された世界観」は、当時流通していた「普通の」意味での世界観と一致する、しかもそこには「国家社会主義の世界観」が含まれる、とわざわざ明示している以上、ライナーには、当時すでに支配的になりつつあった言説に対する護教論的な意図があったと考えざるをえない。あるいは少なくともそのように書くなんらかの事情があったはずである。果たしてハイデガー自身の講義は、このような政治的使用を許すものなのだろうか。哲学的な議論の性質にしたがって、そうした政治的なものと何らかの関わりを持ちうるものなのだろうか。最後にライナーの議論に枠組みを与えた『哲学入門』における世界観に関する議論を見ながら、この問題を検討してみたい。

### (三)『哲学入門』における世界観

ハイデガーの『哲学入門』において、世界観の概念は非常に重要な役割を果たしている。というのもこの講義は、「哲学とはなにか」という大問題に答えることを課題にしているが、この問いに対し、ハイデガーは「哲学は保持としての世界観である」(GA27, 379)という解答を与えているからだ。

世界観という、上述の「普通の」意味では極めて政治的な含意も帯びうる概念は、『存在と時間』で



知られるハイデガー哲学にとっては極めてマイナーな、もしくはほとんど無関係なものでもあるように思われる。事実『存在と時間』ではこの概念が鍵となることはない。さらには後年の「世界像の時代」などを想起すれば、むしろ積極的な意味をもたないのではないかとさえ思われる。

しかし、すでにヤスパースの『世界観の心理学』（一九一五年）の書評（一九一九年）において、ハイデガーは世界観概念に基づいた大部の著作と向き合っている。またその六年後の「カッセル講演」（一九二五年）では、ディルタイの歴史性の問題とともに、「一種の態度決定」として世界観が論じられ、歴史なき「学問以前の」「自然的な世界観」と、「学問的な世界観」という『哲学入門』にも見られる区別、さらには歴史的世界観が論じられている（ハイデガー 2006: 50-51）<sup>2</sup>。ここから、『哲学入門』に至るハイデガーの思索において、たとえ『存在と時間』においてなんら痕跡を見出だせないとしても、世界観概念が何らかの位置を占めていたことは想像に難くない。

また、『存在と時間』以後でいえば、カッシーラーの『シンボル形式の哲学 第二巻 神話的思考』を扱った書評（Heidegger 1929: 255-270）において<sup>3</sup>、『哲学入門』の議論の基礎となるカッシーラーの理論がより詳細に跡づけられている。『哲学入門』の開講と同じ学期中に、ハイデガーはカッシーラーとダヴォスで討論し、多くの若き哲学者に現象学的哲学の未来に期待を抱かせたわけだが、実のところハイデガーは、神話的思考について、カッシーラーの議論から示唆を受け、それを「世界観」の一種として、自らの講義に取り込み、さらには哲学の前提となるものとしての意義を与えようとしていたのである<sup>4</sup>。

以上の概観は決して網羅的なものではないが、世界観という、一見いかにも疑似哲学的観念が、哲学的に言えばその前史を有し、ハイデガー自身『哲学入門』に先立つ（少なくとも）一〇年のあいだ、何らかの形で継続的に触れてきた問題であることが伺えよう。したがって、ライナーに理論的枠組みを与えていたから、あるいは「世界観」という用語を用いているから、などの理由で即座にその政治性を問題にすることは即断であろう。

『黒ノート』と合わせてより詳細な検討が必要なので暫定的なものである、という断りをしてはいるものの、『哲学入門』に関するエマニュエル・ファイユの判断は、このような即断に属している。ファイユは、エーリッヒ・ロートハッカー、ドゥ・クリ

ーク、特にハイデガーと「特権的な関係」を結んでいたアルフレッド・ボイムラーといったこの時代のイデオログのテキストと比較することによって、ハイデガーにおける「保持」や「世界観」がもたらす政治的な含意を理解できることを示唆している（Faye 2014: 324-325, note 2）。しかし、まずは哲学的な意義の確認が必要ではなかろうか。同時代のイデオロギーにおいて「世界観」という語が頻出していたという事実と、ハイデガーがこの語を使用したという事実のみをもって、何らかの政治的な色づけを施そうとするのは、論証上の飛躍である。

『哲学入門』では、哲学は最終的に「保持としての世界観」とであるとされる。もし仮にここでいわれる世界観がライナーのように「普通の意味」での世界観、国家社会主義の世界観も含む世界観であるとしたら、民族主義的世界観、血と大地のイデオロギーもまた一つの哲学となろう。自身が一九三四年に書いた「ヒトラー主義哲学についての若干の省察」に対してレヴィナスは、ヒトラーの世界観を指す言葉として「哲学」の語を用いたことを後年後悔している。もしハイデガーが世界観をライナー的な意味で使用していたのだとすれば、『哲学入門』のテーゼにしたがってヒトラーの世界観もまた哲学ということはできよう。しかし実際のところ、ハイデガーが論じる「世界観」はそのような語の使用を許さない内容を有している。以下、その内実を詳しく見てみたい。

ハイデガーの講義は、哲学とはなにかという問いに答えるものであった。そのためにハイデガーはまず哲学と学問（Wissenschaft）を区別する。今日哲学は大学などの研究機関では学問の一つと見なされているが、その本質においては学問ではない。哲学は学問ではなく世界観である。ハイデガーはこのような主張する。しかし、これは一体どのような意味なのであろうか。これを理解するために重要なのは、世界観の二つの根本可能性を詳述した第四一～四二節である。

第四一節に先立って、世界観の歴史性にあらかじめ注意が促される。すなわち、二つの可能性というものがある。世界観の歴史性に根ざしているということである。諸々の哲学を貫く形而上学としてディルタイが世界観の型を取り出そうとする、そのような作業の際には、「世界観にとって本質的なもの、その歴史的性格、世界観が現存在の出来事（Geschehen）に根を持っており、これが同時に規定している」（GA27:356）ということが忘れられてしまう。二つの可能性とは、一つが神話的世界観であり、もう一

つが保持としての世界観である。歴史的には前者が後者に先行しているが、前者は後者によって完全に取って代わられたわけではなく、今日でも様々な形で残存している。また後者は前者の墮落したものであり、後者もまた三つの墮落した形態を有している。したがって、両者は論理的に対立し、その生成においても互いに無関係なものなのではなく、前者の本質に宿っているものが後者において展開してゆくものに他ならない。以下では、まず (A) 神話的世界観、ついでその (B) 墮落形態としての保持、最後に (C) 保持の三つの墮落形態を見てゆく。

### A. 神話的世界観——抛りどころ、庇護

現存在の本質は世界内存在である。技術の進展により自然環境を人間の都合に合わせて自在に変えようとする現代世界とは異なり、人間を取り囲む世界は元来自然であった。自然として世界内で出会われる存在者は、現存在にとって脅威となるものである。まだ学問や、科学的認識を生み出す世界観へと墮落していない現存在において、存在者の全体としての世界の特徴はその「強大さ」(Übermächtigkeit) である。存在者によって支配されているこの状態では、現存在の魂もまた世界により支配されている。したがって、現存在にとって、存在者だけでなく自己自身も異他的な存在であって、存在者に浸食されない内面性はまだ存在していない。カッシーラーが民族学的研究をもとに進めた「神話的思考」は、ハイデガー流に言えばこのような神話的世界観を表現している。いわゆる「未開民族」の間で「マナ、ワカンダ、オレンダ、マニトゥ」(GA27 :358) などと呼ばれているのは自然の強大さに他ならない。

現存在は、こうした強大さに対していわば剥き出しで曝されており、庇護されていない状態にある(Ungeborgenheit) (GA27 :359)。恐ろしい自然世界は神話的世界観では神として表象されている。これは(キリスト教)神学的には「多神教」と呼ばれ、本来の神を知らない、いわば目覚めていない状態であるかのように見なされている。しかし現存在の形而上学の観点から見れば、この時現存在は強大さに対し驚き、覚醒しているのであって、だからこそ、この規定しがたき力を神々として表象するのである。

この状態において人間は、抛りどころなき状態(Haltlosigkeit)にある。抛りどころ(Halt)を求めて人間は様々な方法に訴える。神々をなだめたり、敬ったり、礼拝したり、生け贄を捧げたり、あるいは神々の力を支配しようとする場合は、魔術、祈祷

などに訴える(GA27 :360)。今日でも誕生、結婚、死、戦争、狩り、農耕、航海に際してなされる様々な儀礼はその名残である。こうして現存在は寄り添なき脅威の世界において抛りどころを得て、強大さの脅威からの庇護(Bergung)を得る。自然の脅威を撓めたり支配する儀礼や所作によって、この脅威から匿われること、これが世界観の第一の形態としての庇護である。

### B. 保持——神話的世界観の墮落形態

儀礼や所作は救いをもたらすための手段である。救いをもたらしてくれるだけにその意義は重要であるが、これがかえって手段の固定化、手段の目的化を招く。手段が目的化し、儀礼などの手段そのものが守られ要求されるようになると、抛りどころとしての、庇護の本来の機能が失われ、庇護は操業(Betrieb)となる。これが第一の世界観の墮落である。操業となった儀礼においては現存在が脅威から守られることはなく、それゆえ現存在は自分自身を見失う。最初は強大さへと委ねられていた現存在はいまや操業へと委ねられ、中身をなくし空(Leere)となり、操業の犠牲となる。このような現存在が自らを失うことを、ハイデガーは保持(Haltung)と呼ぶ。これが第二の世界観である(GA27 :365)。

自らを失ったのに保持と呼ぶのは奇妙であるが、それは空となった現存在がその状態を(操業を通じて)留め置いているからである。しかしそうであるがゆえに、あらたな抛りどころを掴む行為の可能性がここに生じる(GA27 :366)。こうして保持において現存在の行為は、また儀礼や魔術とは違った重要な意味を持つようになる。この可能性において、学問も可能になる(GA27 :370)。

哲学が世界観であるというのはこの保持としての世界観という意味である。したがって、同じ世界観でも庇護としての世界観は哲学とはなりえない。ハイデガーが哲学を世界観であると言う時、それは神話的世界観ではない。古代のゲルマン神話を再構成しフェルキッシュなものを復興させようとする運動が当時のドイツでは興隆しており、ナチズムとも無縁ではなかった(Cf. モッセ 1998, シュヌーアバイン 2001)。ライナーもまたローゼンベルクと並んで、ゲルマン神話の研究で知られたヘルマン・ヴィルトの名を挙げている(Reiner 1934 :246)。ライナーの場合は哲学ではなく信仰をテーマとしているためにゲルマン神話も今日の新たな世界観として挙げられるが、ハイデガーの場合こうした世界観はあくまで



庇護としての世界観に留まり、これが哲学と同一視されることは、定義上ありえない。哲学は保持としての世界観における「超越」である (GA27 :380)。保持としての世界観は確かに庇護としての世界観の墮落として生じるものであるが、それと同一視することはできない。

### C. 保持の三つの墮落形態

最後にこの保持としての世界観から生じる三つの墮落形態を見てみよう。三者はどれも、人間の行為に優位があるという本質から派生している。第一の世界観においては、世界は人間を中心に見られることはなく、むしろ人間の魂それ自身が世界の一部として人間にはよそよそしいものとして見られていた。これに対し第二の世界観においては、何事も人間との関わりから考察されるようになり、一種の人間中心主義が現れる。そこから一つ目の墮落形態が現れる。具体的には心理学や性格学的な分析である。行為の優位という本質から直接派生するのが、二つ目の形態である。重要性を増した人間の行為が芸術や文学の対象となる。「それは必然的に信仰や神話の、むしろたんに文学的美学的にすぎない刷新に必然的に行き着く。これと同時に生じるのが特定の人間の英雄化である」 (GA27 :373)。行為するとは、その行為を選ぶことでもあるが、三つ目はこの選択にともなう決断が主要な役割を果たす。決断を行う「私」 (Ich) の実存、その内面性が重要な意義をもつ。こうした形での保持は、「特定の宗教、たとえばキリスト教的な宗教性」と容易に結びつき、また、キルケゴール思想を刷新する「実存主義」においても同様に宗教性と決断が強調される (GA27 :374)。

これら三つの墮落形態は、互いに関連しているものであり、また混ざりあうことによってその「うさんくささ」 (Unechtheit) や「途方に暮れてしまう状態」 (Ratlosigkeit) が増幅しうる。ハイデガーはそれ以上深入りしないが、「そのような状況に、今日我々はいるのです」 (GA27 :374) とはっきり述べている。第二の英雄崇拜や、第三の決断主義への言及は、世界観としての哲学の定義から生じうる政治的な逸脱に対する予防線として読むことができる。しかし、同時に、それら、哲学とは別物の世界観は、哲学と同様、保持としての世界観から生じうるのである。このリスクをハイデガーは見極めていたはずであり、その限りでは、これらの叙述から、『哲学入門』を『信の現象』のようなイデオロギーの護教論として読むことはますますできないであろう。

### 結

信じるという行為の現象学的、存在論的な分析であるライナーの『信の現象』は、その分析により国家社会主義の世界観、人種主義的世界観を現存在の構造そのものに基づけていた。時間の悲劇に喘ぐ時代精神のもと、救いを求める数々の試みがあった。そのなかでライナーは、理性主義によって放擲された信仰に再び存在論的な基礎付けを与えることにより救済を求めようとしたと思われる。しかしひとたび信仰を基礎付けたかと思えば、「信仰」にありとあらゆる形態を含ませてしまっている。しかもそれは、ナチズム関連のイデオロギーを意図的に含ませているように見えるのである。

学問、科学以前の神話的世界観を、世界内存在という現存在の構造そのものに組み込もうとするハイデガーもまた、その論理だけなら様々な政治的神話、儀礼、個人崇拜などを哲学的に擁護する言説に加担しえただろう。しかし『哲学入門』の論理を粒さに追うならば、そのような危険は入念に退けられている。それでも、保持としての世界観の墮落と見なされていた諸形態は、その根をたしかに保持としての世界観に持っており、この世界観は同時に、それが超越であるかぎりでは哲学なのである。

ヒトラー主義のような世界観を哲学と見なす危険を認めつつも、それがあつた種の初歩的な哲学であると若きレヴィナスは論じていたが、彼の聴講した『哲学入門』は、そのような哲学と「墮落した」世界観との結びつきのリスクを確かに内に秘めていたのである。ファイユの即断に対して、『哲学入門』をナチズムや反ユダヤ主義と安易に結びつけることはできないが、同時に哲学とイデオロギーが接近しうる理路をハイデガー自身が示しているのもまた事実である。

そのことの問題はとりわけ、哲学が保持の一つとして位置づけられていることにあるのではないだろうか。これはハイデガー自身が哲学の本質をどこに求めたのかという問題とも切り離せないが、我々としては、哲学はむしろ、自然発生的な世界観に対する違和感に起源をもつのではないかと考える。ソクラテスは共同体内部で自明とされている事柄をあえて問い直すことをし続けたのであり、哲学とはその意味で慣習的な世界観に問いを投げかけることであり、世界観との断絶である。世界観というものが、世界に対して世界像を投企するのであれば、哲学とはその中断に他ならない。もし哲学をこのような意



味で理解するのであれば、哲学がイデオロギー的な世界観とその根において地続きのものになりうる可能性は排除されよう。哲学とイデオロギーとの内的な結びつきの問題は、『哲学入門』に焦点を合わせてみると、哲学そのものを人類史的な世界観の変遷とどのように関連づけるかという問題として検討すべきものであることが分かる。我々にはこの、ハイデガーによる関連付けに問題があるように見える。本稿はライナーの所論をきっかけに、ハイデガーにおける哲学とイデオロギーの内的連関の問題がどこにあるのか、その所在を明らかにした。問題のさらなる検討は別稿での課題としたい。

## 参考文献

- Cassirer, Ernst, 1973, *Philosophie der Symbolische Formen zweiter Teil. das Mythische Denken*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt. 木田元訳『シンボル形式の哲学(二) 第二巻 神話的思考』岩波文庫、一九九一年
- Dastur, Françoise, 2009, «Heidegger : Histoire et historicité. Le débat avec Dilthey et l'influence de Yorck von Wartenburg», in S. Jollivet et Cl. Romano (éd.), *Heidegger en dialogue 1912-1930 : Rencontres, affinités et confrontations*, J. Vrin, pp.11-32.
- Faye, Emmanuel, 2014, «La «vision du monde» antisémite de Heidegger à l'ombre de ses Cahiers noirs», in Emmanuel Faye (dir.), *Heidegger, le sol, la communauté, la race*, Beauchesne, pp. 307-328.
- Jaran, François, 2010, *La Métaphysique du Dasein – Heidegger et la possibilité de la métaphysique (1927-1930)*, préface de Jean Grondin, Zeta Books
- 2012, *Heidegger inédit. 1929-1930 L'inachevable Être et temps*, J. Vrin
- Koyré, Alexandre, 1971, *Études d'histoire de la pensée philosophique*, Gallimard
- Heidegger, Martin, 1978, “Anmerkungen zu Karl Jaspers «Psychologie der Weltanschauungen»”, *Wegmarken*, Vittorio Klostermann, Zweite, erweiterte und durchgesehene Auflage
- 2006 “Wilhelm Diltheys Forschungsarbeit und der gegenwärtige Kampf um eine historische Weltanschauung”, in *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd. 8, 1992-93, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen. 「カッセル講演」(一九二五年) 後藤嘉也訳『ハイデガー カッセル講演』平凡社ライブラリー、二〇〇六年、四四～一一九頁
- 1925, “Besprechung: Ernst Cassirer; Philosophie der symbolischen Formen. 2. Teil: Das mythische Denken. Bruno Cassirer Verlag, Berlin 1925” (初出 1928, *Deutsche Literaturzeitung* (Berlin), N.F. 5, 1928, Heft 21, 1000-1012), GA3, S.255-270.
- 1929, *Kant und das Problem der Metaphysik* (1929), GA3, 2. Klostermann Rote Reihe, 7. Auflage, Vittorio Klostermann, 2010. 門脇卓爾、ハルムート・ブフナー訳『カントと形而上学の問題』ハイデッガー全集第3巻、創文社、二〇〇三年
- 2001, GA27, *Einleitung in die Philosophie*, 2., durchgesehene Auflage, Vittorio Klostermann.
- Lee, Jaehoon, 2014, «Heidegger en 1924 : l'influence de Yorck von Wartenburg sur son interprétation de Descartes», in Emmanuel Faye (dir.), *Heidegger, le sol, la communauté, la race*, Beauchesne, 2014, pp. 25-48.
- Lévinas, Emmanuel, 1931-32, «Der Begriff des Irrationalen als philosophisches Problem, H. E. EISENHUTH» *Recherche philosophiques*, I, pp. 385-386.
- 1933a : «Philosophische Forschungswege, Ratschläge und Warnungen, Hans DRIESCH», *Revue philosophique de la France et de l'Étranger*, CXVI, juillet à décembre, pp. 290-291.
- 1933b : «La compréhension de la spiritualité en France et en Allemagne» (*Varias*, Kaunas, n°5, vol.7, pp. 271-280), tr. fr. par Liudmila Edel-Matuolis, *Cité*, n°25, Paris, PUF, 2006, pp. 126-137. [CSFA]
- 1934 : «Phénoménologie», *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, novembre-décembre, pp.414-420.
- 1934-35 : «La présence totale, Louis Lavelle», *Recherches philosophiques*, IV, pp. 392-395.
- 1937a : «Das Phänomen des Glaubens dargestellt im Hinblick auf das Problem seines metaphysischen Gehalts, Hans Reiner», *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, n°74, septembre-décembre, pp. 258-260.
- 1937b : «Kierkegaard et la philosophie existentielle (Vox clamantis in deserto), Leon Chestov», *Revue des Études Juives*, tome II, n°1-2, juillet-décembre, pp. 139-141.
- Mack, Michael, 2003, *German Idealism and the Jew: The Inner Anti-Semitism of Philosophy and German Jewish Responses*, The University of Chicago Press.
- Reiner, Hans, 1934, *Das Phänomen des Glaubens dargestellt im Hinblick auf das Problem seines metaphysischen Gehalts*, Max Niemeyer Verlag, Halle (Saale)
- Rosenberg, Alfred, 1934, *Der Mythos des 20. Jahrhundert. Eine Wertung der seelich-geistigen Gestaltenkämpfe unserer Zeit*, Hoheneichen Verlag, München. 吹田順助・上村清延訳『二十世紀の神話』中央公論社、一九三八年
- Wahl, Jean, 1998, *Introduction à la pensée de Heidegger*, Livre de poche.
- 加藤尚武、1997、『現代倫理学入門』講談社学術文庫
- S.V. シュヌーアバイン、2001、池田昭編『現代社会のカルト運動 ネオゲルマン異教』浅野洋、伊藤勉訳、恒星社厚生閣
- ディルタイ、1935、『世界観の研究』山本英一訳、岩波文庫

ペーター・トラヴニー、中田光雄、齋藤元紀編、2015、『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か「黒ノート」をめぐる討議』水声社

アドルフ・ヒトラー、2001、『わが闘争（上）Ⅰ民族主義的世界観』（原著一九二五年）、『わが闘争（下）Ⅱ国家社会主義運動』（原著一九二七年）、平野一郎・将積茂訳、角川文庫、改版初版

レオン・ポリアコフ、2005、『反ユダヤ主義の歴史 Ⅲ ヴォルテールからヴァーグナーまで』菅野賢治訳、筑摩書房

ジョージ・L・モッセ、1998、『フェルキッシュ革命 ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』植村和秀・大川清丈・城達也・野村耕一訳、柏書房

ハンス・ライナー、1972、『哲学としての倫理学 歴史上と現在のその問題と学説』松本良彦訳、大明堂

——1970、『義務と好悪 特にカントとシラーに関連しての道德の基礎の論及と新規定（上）』松本良彦訳、大明堂

た（ディルタイ 1935 :22）。

<sup>2</sup> ディルタイの名は『存在と時間』では現存在の歴史性を論じる際に、「ディルタイ＝ヨルク卿往復書簡」とともに言及されており、私信でハイデガーはヨルクの議論に軍配を挙げていたことが知られている（フリトヨフ・ローディ「序文」Heidegger 2006:13）。したがって世界観の概念をハイデガーが使用するとき、そこには単に現存在の根本体制が念頭にあるだけでなく、歴史性の問題も含まれていたはずである。問題の整理とその意味をここで扱うことはできないが、時間の問題に触れるだけに、この点は非常に重要であることだけ指摘しておきたい。

<sup>3</sup> フォン・ヘルマンによれば、執筆は1928年（Nachwort des Herausgeber, GA3 :314）。『カントと形而上学の問題』に収録。

<sup>4</sup> とはいえこの問題に関するカッシーラーのアプローチに対する批判的言及も見られる。たとえば、GA27:370 など。

（平成30年9月25日受付、平成30年11月6日受理）

<sup>1</sup> ディルタイもまた世界観の基礎を「世界像」に求めている